

ニユージーランドで規模拡大の可能性をみました

無農薬ダイコン販売

今冬は、例年になく穏やかな天候が続きました。小麦の緑が日まじりに色鮮やかになっていきます。積雪が少ないので3月半ば過ぎるころにはトラクターが走り回れる日々がやってきそうです。

早く農作業ができるといえば、深浦のこの地に入植した昭和51年が思い出されます。ほかの仲間3人（一人は中途離脱）とやつとのおもいで、30haの農地を取得して、農事組合法人黄金崎農場をスタートさせたのです。現在の20分の1にしか過ぎない面積ですが、当時としては大きなものでした。その購入農地は耕作放棄されていたために荒れ放題でした。それを雪が少ないのを幸いに3月半ばから開墾し始めたのです。ススキ、ハギなどが一面を覆って原野化し、ヤナギ、マンサク、ウツギなどの低灌木もおおい茂っている土地をブルドーザーやトラクターを使って本物の農地に生まれ変わらせたのです。今の農場の原点になった死に物狂いの作業だっただけに、この時期になると、脳裏によみがえることがあるのです。あのつらい血のにじむような苦労があったからこそ、これまでもがんばってこれたし、これからもどんな試練がこようとも、耐えられる気がするのです。

現在の主な作業は、越冬したニンジンの掘りとり、加工ダイコンのカット、県内向けを主体とした種バレイショの選別です。ニンジンには、大手メーカーのキャロットジュース原料として出荷されます。ダイコンは、大手漬物メーカーに納入します。種バレイショは、出荷直前の選別作業になりますが、選別して長期にわたって貯蔵しておくこと

品質劣化、腐敗などが生じているのを分らないまま、出荷することになり、評判をおとすことになりそうです。そこで、当農場から直接生産者にわたる県内向けでは、出荷直前に選別して、品質を保証するようにしているのです。

品質保証とは明示こそしていませんが、ユーザーの信用を得るためには、当然の対応なのです。

3月11日、当農場産の有機・無農薬ダイコンを使ったたくあんづけが全国約100店舗のイトーヨーカドーから発売になりました。減農薬のたくあんづけは既に神戸の生協で高い評価をいただいているだけに、この完全無農薬ダイコンにも期待しております。発売してから日数がたっていないために、詳細な報告は入っていませんが、製造した群馬県の株式会社山傳から聞くところでは出足好調のようです。

商品仕様は、16cmにカットされたもので、「樽だし・こだわりの大根」の商品名が印刷され、その下には「有機肥料・無農薬大根使用」と書かれています。裏には、素材を紹介するコピーが次のように印刷されています。

「このたくあんの大根は、二十数年前に設立された青森県西津軽郡にある黄金崎農場にて収穫されたものです。弊社（山傳）はこの農場と協同で、より良い品質の原料を求め、徹底した土づくりに努力を重ねました。本商品はこの農場において、無農薬・有機肥料により大切に育てられた大根のみを原料として使用しています」

完全無農薬生産だけに、周りからは品質、収量の低下を心配する声が強かったのですが、栽培努力で見事なダイコンに仕上げたつもりです。食べ物に対して健康・安全志向を強める消費者ニーズ

に合っているだけに、人気商品になることを願っています。

今のところ、9年産の無農薬ダイコンの作付けは、8年産より5haほど多い15haを見込んでいます。

ダイコンの収穫は機械化が遅れ、手作業です。この省力化は、担当する私にとって大きな課題です。この解決のために、平成9年に思い切った収穫機械をいれることにしました。昨年の夏、試験してみても、ものになるとみただけです。加工専用機と加工・生食兼用機の2台です。能力は人手の2倍程度ですから、それほどの省力化にはなりません。70ha以上の面積があるだけに、女性を掘りとりという重労働から解放するだけでも、価値があるとみています。ほかに、ニンジンの掘りとり機も導入する予定です。こうした新しい機械が活躍する収穫期が待ち遠しくなります。

初の四大卒就農

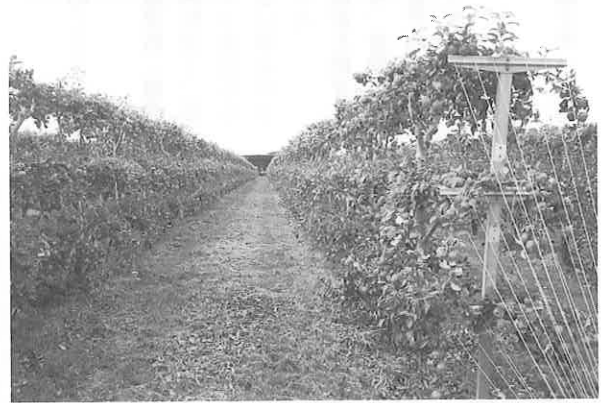
前号で、農場代表の佐々木君夫の長男と私の長男が就農することになったと、書きましたが、農場に四年生大学卒業の若者が入ることになりました。

弘前大学農学部、明治大学理工学部、それに法政大学法学部をこの春に卒業した青年です。これまで、農場で働いた人には、四年生大学出身者がおらず、それが一挙に3人も農場につとめるというのですから驚きです。農学部出身者ともかくとして、理工学士と法学士という、農業とは縁遠い学部出身です。かれらが4月からどんな働きをみせるか、興味津々です。

後継者難がいわれて久しい農業ですが、生命維持の基本となる作物生産を担う産業だけに、関心をもつ若者は多いはず。飽食に浮かれています。



上：ニュージーランドのリンゴの管理作業
下：作業効率の高い樹形



我が国はともかく、世界的には多くの人が飢えに瀕しているのです。

こうした実情をよく知っている若者たちが、農業に向けた関心をさらに膨らませるのが我々農業に従事する者の役目なのです。それと同時に、就農した若者が、意欲を持続させるようにすることも大事です。

先日ある講演でマクドナルド・ハンバーガーの創始者の話を聞きました。彼は五十代半ばに、繁盛している田舎のハンバーガー店にヒントを得て、アメリカにチェーン店をめぐらし、世界にも打ってました。そして、八十数才までの間に3500億円の財産を成したということでした。

私はこの話から、五十代といえども、志しをたてれば実現させる可能性があるということ、責任者を配置したチェーン展開ということに興味をもちました。特に、チェーン展開は、大規模な法人経営にとっても参考になるところが大きいとい

う気がします。

経営規模が大きくなると、どうしても人は組織の函車としての役割を果たす面が強くなります。しかし、これでは、自由な発想が少なくなり、その人がもつ創造性も生かされず、経営にとって大きなマイナスになるのではないかと思います。

そのためには、どうすればいいか。私は、一定の面積なり、一つの作目なりに、生産に関して責任をもたせるシステムにすべきだと思っております。組織の函車になるより、自由人として経営に責任をもつ。ただし、マクドナルドのように、組織全体の基本スタンスはみな同じとすることです。

この考えは農場として、まだ認知されていませんが、農業は、こうした対応ができる職業なのですから。

「若者たちが自由闊達に、自分の力で作業計画を書き、栽培管理に努め、望まれる農産物をつくりあげる。こうすれば、農業への夢が膨らみ、農業に定着する人たちが増える」

そうなれば、外から農業をみる若者たちにも大きな影響を及ぼすことになるでしょう。このありかたについては、仲間と大いに議論していく必要があるとみています。

ニュージーランドリンゴに技術をみる

この1月に、ニュージーランドのリンゴづくりを見学してきました。私の実家では約2haのリンゴをつくっており、私もときおり手伝っているだけに、我が国へ輸入解禁されて競争相手となるニュージーランドへ行ったのです。そこで驚いたのは、樹の作り方です。リンゴは収量の確保、品質の向上のために、剪定という作業を行って樹の形を整えるのですが、彼の地のりんご樹の形は、リンゴ王国とされる我が青森県とまるっきり違うの

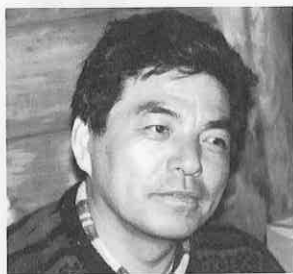
です。本県の樹形は、紡錘型のような感じですが、ニュージーランドでは、写真のように壁型で果実の成り部分が3段あるいは4段のようになっているのです。

こうすると、葉かけ、収穫などの作業がし易くなるのは明らかです。樹形づくりに、作業効率の思想が強く生かされているのです。それでも、収量が10a5tを越えており、青森県平均の2tを大幅に上回っているから脅威です。

本県のりんご剪定は、きめ細かな作業で、芸術とさえいわれ、残念ながら規模拡大の障害にもなっているのです。一方ニュージーランドのそれは、生産性を考えた本当の農業技術という感じがし、これなら、一戸で20haも可能となり、規模拡大も容易になります。

規模拡大に困難を伴う園芸作物栽培ですが、こうした考え方を我が国も積極的に取り入れなければ、国際化の中で生きていくのがますます難しくなるでしょう。

2月に3日間、社員ら16人で長崎のハウステンボス視察など慰労と研修を兼ねた旅行に行ってみました。こうした旅行により、心身をリフレッシュさせ、新たな意気込みで仕事に取り組み、こうした努力があつて黄金崎農場は今日まで続いてきたという思いがしています。仕事以外でも、心をつなぐようなものが、大規模法人経営では必要なのです。



きむら・しんいち/1950年9月生まれ。青森県立五所川原農林高校卒業。4Hクラブの仲間の佐々木君夫、竹内雅孝とともに「大規模で、企業的で、給料をもらう」農場を夢見て、76年農事組合法人黄金崎農場を設立